

内面の対話



長嶋恒義

ささやかなエピソードですが、二つの実例から入らせていただきたい。一年生の古典を担当し、赤点になった生徒がかなり出た際です。春休みに集めて、補習をやることにしました。文語文法にしぼり、最初からやり直したのです。得点の高い生徒でさえ、一年なら、文法は怪しいわけです。ところが補習の終わるころには、赤点組が彼らよりやれるように変わったのです。これには驚き、実にうれしく感じました。成績不振といつても、こんな程度で、学習とか指導とかを思い返させられたわけです。

また、生徒指導をしていた時、自殺未遂の生徒を扱ったことがあります。二人だけで、三時間ほど話し合っただけですが、理由を尋ねると、青春期の感

傷的な幻滅感でした。自分は少年のころより、くだらなくなつたようで、将来が不安になる。自分がつまらない人間に変わつてゆくのを、これ以上は耐え難くて……というのです。私は役目からもあり、自分のコンプレックスまでさらけ出しました。それでも生きてゆくことの美しさを、熱っぽく訴えねばおれません。やがて彼は私の様子に、幻影を見たようです。

「先生のような歳になられても、情熱を持つておれるのだつたら……」

表情が和らぎ、気持ちがあほくれたふうでした。私はこれを見て、内面の微妙さや、暗示の不思議な力を思いました。私自身は凡庸だろうと、役割は大きいことを痛感したのです。

ごくありふれていますが、教育は地

味な営みと思えるからです。問題は実践と継続らしく、時流の皮相さを警戒したいのです。それに学校は教育のセンターだろうと、学校だけで何もかもやれるわけではありません。そこで特に高校の場合、教場こそ私たちの生命と感ずります。

常に望む風景——心をこめて話し、生徒たちがこれに応じて、燃え出してくれる場面です。それまでノートをとっていないながら、手は止まり、全員が姿勢を起こす。顔の動き方さえ違い、眼の光だけが内容を追う。教室の空気はふくらんで来て、しかも張りが出ていくようになります。彼らの内面に対し、交流のパイプが太くなり、何かが音高く流れ出して……。いえ、教師という意識など消え、教材と生徒たちと自分とが一

体化して、ただ文化の偉大さにふれるのです。

こういう場合に、問いを生徒たちに投げかけてみます。ふだん反応しないような者まで、考えた答えがもどつてきて、はつとさせられたりします。すでに内面の対話が起つており、精神が能動的になつていくからでしょう。そこで逆に突つ込んだ質問も出て、学習内容が深められるのです。

これを裏から見ますなら、私たちは無形の言語に頼っているわけでしょう。生徒たちの心に働きかけ、動かさなければ、と思うのです。学習活動は沈滞し、教壇にいるのもやりきれなくなり、そこで内面の対話を充実させるため、準備のたいせつさを感じるのです。教材へのじゅうぶんな理解はもとより扱い方の選定を誤ると、授業に血が通わなくなつて来ましよう。

つい惰性に陥り、くふうを怠り、マンネリ化しやすいように思います。あるいは教材によつては、筆者の内面に感情移入し難い場合もあります。教師側が熱中できなければ、生徒たちは敏感なんですね。これをどう突き破つてゆくか、新鮮な意欲をよび覚ましてゆくしかないでしょう。教室を後にして、疲労感は深くても、心の充足感があるように、と念じながら……。

明日の世界を動かし、伸びようとする若者たちに幸あれ。

(福島県立会津高等学校教諭)



まず、教師が熱中する授業を